

はじめよう 名市大の教学IR

ポストコロナ時代の教学発展への足掛かり



理事長／学長
郡 健二郎

IR (Institutional Research) は、大学の意思決定を支援する重要な役割を果たしています。データを収集、分析することで、これまで気づかなかつた名市大の現状と将来像が見えてくるからです。

本学では、多種多様な学生が日々、勉学に励んでいます。そんな未来のリーダーたちにより良い環境を提供するため、学生が何を求め、大学や教員は何をしたらよいのか。その答えを探すため、IRの重要性はますます高まっています。大学全体で取り組むことがIRの発展につながり、ひいては名市大の発展にもつながります。教職員の皆様からの温かいご理解とご協力をお願い申し上げます。

どうしたらもっと名市大をアピールできるのか。どうしたら学生の大学への満足度をより一層高められるのか。データが導く結果は嘘をつきません。教職員のやる気と協力で、よい良い名市大を目指してまいりましょう。



高等教育院 院長
(教授・理学研究科兼務)
高石 鉄雄

「教学IR」という言葉は、近年では令和2年1月の「中央教育審議会大学分科会」報告書に出てきます。そこには、教育に関わる客観的なデータ分析に基づいた大学における諸活動の効果検証、あるいは、情報提供等を通じた大学の意思決定または業務の継続的改善を支援することなどと書かれており、大学が不断の努力をもって取り組むべき課題とされています。

次項では「学修者本位の教育」実現に向けて教育情報を可視化した例（カリキュラムマップ）と、学修情報を使って教育の達成度を個人について示した例（レーダーチャート）を記載しました。今後は更に、学生の入学時点のデータ（入試成績など）、在学中のデータ（履修、成績、修得単位数、学習履歴、課外活動など）、卒業時点のデータ（進路、就職先、資格、最終成績など）などの収集・分析・情報提供を進め、情報として関係各所に提供することで本学の教学発展につなげたいと考えています。各部局教職員の皆さま方のより一層のご理解とご協力のほど、よろしくお願ひいたします。

IRとは

「教学IR」、大学においてここ数年でよく聞かれるようになった言葉のひとつですが、どのようなイメージをお持ちでしょうか。まずIRですが、Institutional Researchを略したもので、日本語では「機関調査」「機関研究」と訳されることが多いようです。ただ、あまりハッキリとしたイメージが伝わる言葉ではないため、そのまま「IR」という略語が定着しているのが現状になります。

大学におけるIRの起源は1960年代の米国と言われており、教育、経営、財務といった、大学が収集、保有するさまざまなデータを分析し、大学組織運営のための計画策定や意思決定を支援するための、機関内で行われる調査研究と定義されています。日本での導入は、国立大学の法人化と機関別認証評価が課されるようになった2004年頃からと

されています。その際、学生の学修時間と成績データといった、これまで別個にしか扱われることのなかったデータを突き合わせることによって、教育活動、学修活動の評価ができるという点が特に注目されました。このように、IRのうちとりわけ教育改善に資するものを「教学IR」と呼んでおり、大学全体として取り組んでいかなくてはいけない課題となっています。

教学マネジメントを支える基盤となるIR

このようにIRは、もともと大学全体の調査を指すものでした。しかし、今日の大学には、教学IRとして個々の教育課程にも着目し、その学修成果を把握・可視化することが強く求められています。それによって、学生には主体的な学びを促し、大学（教員）は教育改革、授業計画・方法

の改善に取り組み、さらには社会に対して大学の説明責任を果たすこと、が期待されているのです。

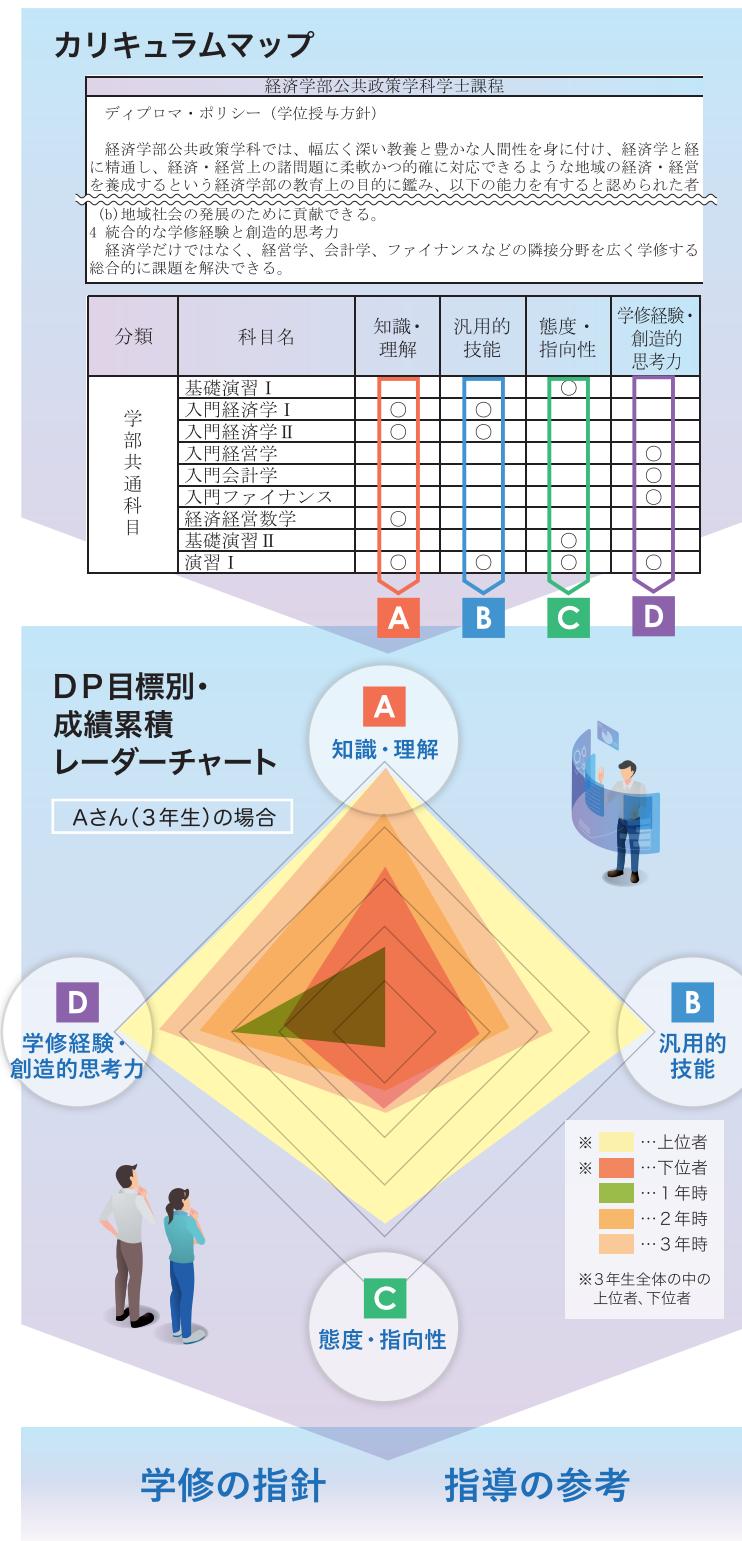
これらの期待に適切に応えるためには、活用できる資源を特定しながら、計画的な教育改善を組織的に続けるプロセスが必要です。教学マネジメントとは、そのための計画や組織をコントロールする一連の活動といえます。

たとえば、学力の質を考慮した学修目標を定め、そのための科目・教育課程を編成・実施し、学修目標の達成度を評価して、その結果をカリキュラムの評価と改善につなげることなどが想定されます。その際、教学IRは各種データを意味のある情報に変換して提供し、研究科や学部などの意思決定や計画立案などをサポートする役割を果たします。そのため、教学IRは教学マネジメントの基盤と位置づけられています。

IRで何ができる？

IR業務の第一歩は、学内のデータを集め、それぞれの項目がどのように定義されているかを確認することです。実態を把握するためには、何を示した数値なのかを正しく理解する必要があるからです。ただし、それだけではデータは数字の羅列に過ぎません。集めたデータを意味のある情報に変換することがとても重要です。

では、「情報」に変換するとはどのようなことなのか。本学の学修成果指標の一つであるレーダーチャートを例に見ていきましょう。



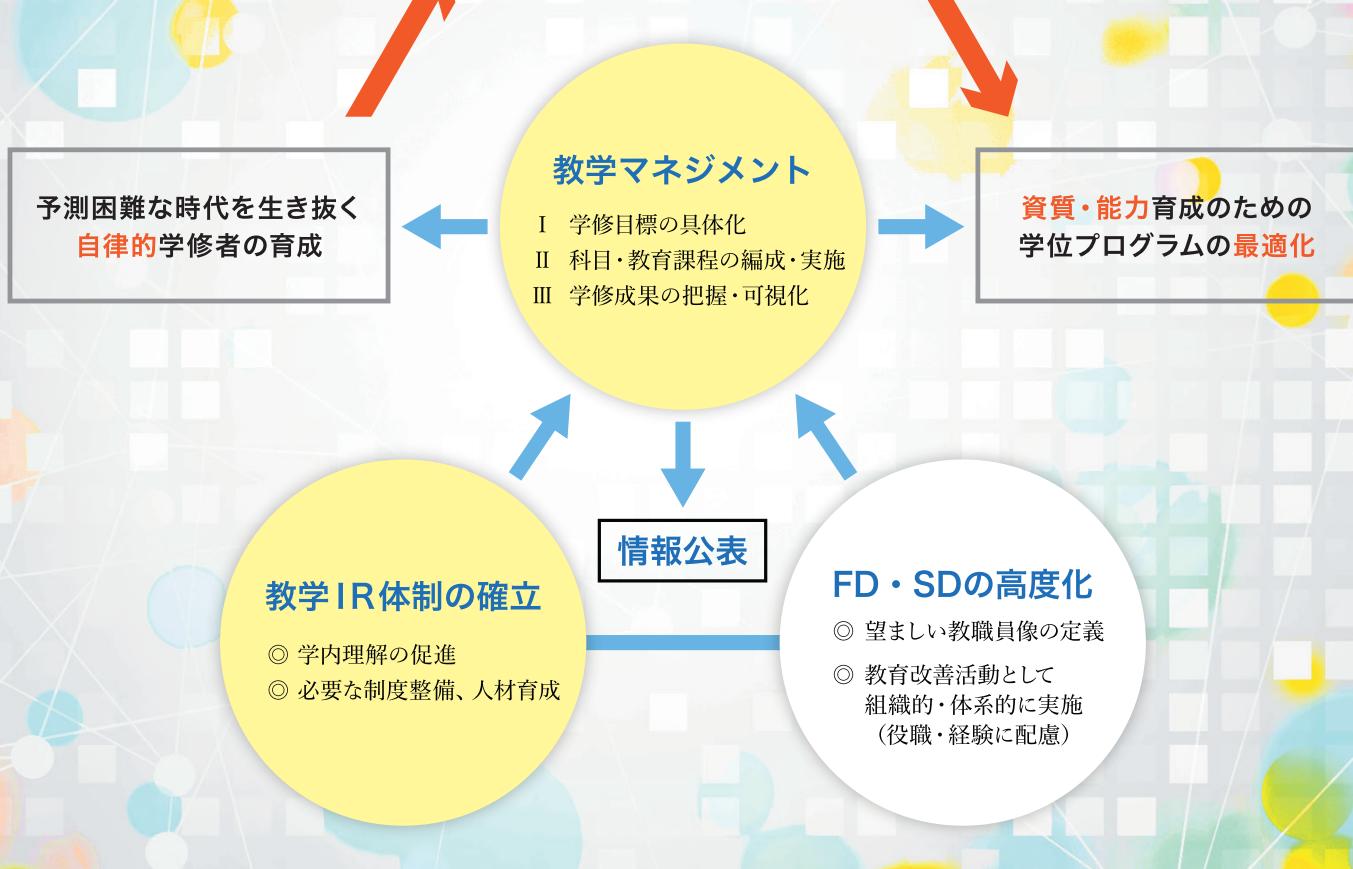
本学で使用しているレーダーチャートは、教育課程（学部）ごとに設定されているディプロマ・ポリシー（学位授与方針）の4～5項目それぞれを軸としています。単位修得した授業科目に関連付けられている項目に、成績評価を数値化して累積していくことによりレーダーチャートを形成、学修成果を可視化しています。すなわち、それまでの履修によって、ディプロマ・ポリシーの各項目をどの程度達成しているかを視覚的に捉えることができるものとなっています。

このように、レーダーチャートは学生個人の学修成果を可視化するものです。しかし、ただ「見る」だけでなく、どのように活用するかを実際に考えてもらわなくてはなりません。学生の場合には、自身に足りない学修領域を把握し、以後の履修計画の参考とする。教員であれば履修指導の参考として活用するといったことになります。このように、学生、教員双方に有意義なフィードバックを与えることもIRの重要な役割のひとつです。

データの意味を視覚的、直感的に伝えることができれば、「改善に役立ててみよう!」と多くの学生、教職員が考え、その問題意識に応えることができるようになるのではないでしょうか。

カリキュラムマップは、授業科目とディプロマ・ポリシー上の学修成果との関連を示した表です。本学では、カリキュラムマップを大学ウェブにも公開しており、学修成果と個々の科目の対応関係を確認することができます。

学修者本位の教育の実現



名古屋市立大学高等教育院

〈お問い合わせ〉名古屋市立大学 事務局 大学管理部 教務企画室

TEL (052) 872-5804

kyoumu_kikaku@sec.nagoya-cu.ac.jp

高等教育院は、本学における教育改革を全学的に推進するために設置された組織です。教養教育及び全学語学教育の企画・立案から実施までを担うとともに、教学IRやFD（教育方法等を改善するための組織的な研究、研修等に取り組む活動）といった、教育の質保証につながる取り組みの全学的な統括を担っています。

教育に関する話題を広く提供するため、「高等教育院通信」を発行したり、FDを活性化させるために定期的に教育改革フォーラム等を開催したりと、全学に向けて様々な活動を行っています。詳しくはオリジナルサイト（右のQRコードまたは下のURLよりアクセス）にてご覧ください。

